



TITLE:

<雑叢>小島氏の反批判を讀んで

AUTHOR(S):

西川, 喜久子

CITATION:

西川, 喜久子. <雑叢>小島氏の反批判を讀んで. 東洋史研究 1981, 40(2): 343-350

ISSUE DATE:

1981-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153816>

RIGHT:

小島氏の反批判を讀んで

西 川 喜久子

小島晉治著『太平天国革命の歴史と思想』に對する私の「書評」に對し、著者から反批判をいただいた（本誌第39卷第1號）。批判の一部は承認するが、納得できない點も多いので、再び筆を執らせていただく。以下、小島氏の行論に即して順次検討していきたい。

(一) まず最初に、私が「本書は、小島氏が過去二十年間に發表された……」と書いたことに對する小島氏の批判について。小島氏がいわれる通り著書の「まえがき」にはたしかに「ここの二十二年の間に書いたものに……」と書かれている。しかし、「あとがき」の收録論文リストには、一九五九年刊行の『歴史評論』掲載の論稿が含まれており、これについて「まえがき」には何の説明もなかった。「十二、三年間に書いたもの」としたのはそれなりの理由があるからだ」と言われるが、著書には「それなりの理由」も何も一切説明はなく、今回はじめて「説明」がなされたのである。「歴史評論」掲載論稿については「中國での太平天国研究を歴史的にふりかえるのに有効と考えたから」例外的に收録した、と述べられた。小島氏は、中國での研究を歴史的にふりかえることには、著書の編集方針からはみだす例外を作つてまで收録するほど重要な意義を認められながら、氏自身の研究を歴史的にふりかえることに意義を認め

められなかったようである。弘文堂『太平天国の思想』（一九六〇年）、筑摩書房『太平天国』（一九六一年）の二論文、とくに後者は、從來しばしば研究者によって取り上げられ、引用され、據りどころとされてきており、小島氏が太平天国研究の論文集を出版されたとなれば、この二論文も收録されていると思うのは至極自然である。それが收録されていなければ、意外に思うのも當然ではなからうか。また、小島氏は「二十年前に書いたもの」と、この書に收めたものとのちがいを總括して明示していないことを以て、『研究者のとりべき態度』をうんぬんされたのでは、たまったものではない。」と言われる。だが「書評」を讀んでいただければわかるように、私は、單に「二十年前に書いたもの」と、この書に收めたものとのちがいを總括して明示していないこと」を以て、「研究者のとりべき態度」を問題にしたのではない。小島氏が現在の到達點から、既發表論文に對する取捨選擇、加筆、訂正、削除を行なつて著書を編集しておられることは明らかであるのに、この點についての説明がないことを指摘し（著書の「あとがき」には「再録にあたっては、すべてについて必要最低限の加筆、訂正を行なつた」としか記されていない）、長年同一のテーマを研究していれば、自己の舊説を改める必要が生じることは、當然ありうることであるが、どこをどう變えたのか、何が契機となつたのか、このような形で一書にまとめられる機會に明らかにしていただきたいかつた、と書いたのである。それを「たまったものではない」としか受けとめられない小島氏の感覺には驚きを禁じ得ない。

(二) 第一部「農民革命の思想」に對して呈した疑問について。「甚だ見當外な疑問だ」とされながらも、詳細なお答をいただきたい

た。たしかにこの疑問は、必ずしも小島氏の論文の核心にかかわる問題とは言えず、私自身も、拙文において提起した諸々の疑問、批判の中では、どちらかといえば枝葉に属する疑問として位置づけていたこともあって、十分煮つめることなく不用意に記してしまったことを反省している。私がより重要と考え、小島氏の見解をおききしたいと思っていたのは、むしろ、末尾に「なお、第一章と第二章では、上帝會の特質についての捉え方が異なっているが、この點は後述する」と記し、後半部の「本書全體にかかわる問題提起ないし感想」の中で、「捉え方の違い」を具體的に指摘しておいた、その點であつた。しかし、この點については、「この部分を含む末段全體については、いづれ答えさせていただく。」とあつて、今回はお答えをいただけなかった。

(三) 第二部「太平天国史の諸問題」について。

① 私が「山開部、邊境地帯という地理的條件によつて土地所有形態、階級關係を一義的に規定できるものであろうか。」と疑問を呈したことに對し、小島氏は「だが私の原文はこうだ。

『第一點はいづれも山地が多くて、田が少なく、もしくは土地の生産性が低くて米の自給が不可能であるような山開部ないし邊境（著書の原文は邊境地帯となつてゐる——西川）に發生してゐる』と。

みられるように無限定に『山開部ないし邊境地帯』といつてゐるのではない。（傍點小島氏）と述べ、「西川氏は筆者が必要不可欠と考えて付與している限定條件を、いともあさり無視して、筆者の含意とはことなつた内容に變えてしまふ。この個別性を輕視ないし無視して、短絡的に一般化するのが、氏の思考方法の特徴と私は思

う。」と論難された。傍點を附された句が、必要不可欠な限定條件だとすれば、抗糧暴動が起つた地域は、「山開部ないし邊境地帯」のうちでも、とくに「山地が多くて、田が少なく、もしくは土地の生産性が低くて米の自給が不可能であるような」（以下「……ような」と略記させていただく）地域に限定されている、ということにならう。あるいは、「山開部ないし邊境地帯」に「……ような山開部ないし邊境地帯」と「……ようでない山開部ないし邊境地帯」とがあり、抗糧暴動は前者で起つた、ということであらう。しかし著書を熟讀玩味しても、後者のような山開部ないし邊境地帯を明示する語は見當らず、また、小島氏が「……ような山開部ないし邊境地帯」以外に、「……ようでない山開部ないし邊境地帯」を想定しておられた形跡も見出せない。「……ような」の句は、著書九九〜一〇〇頁に次の文脈の中で記されている。

「湖南、湖北において大規模な抗糧暴動が起つた耒陽、安化、崇陽などの諸縣についてみるとほぼつぎのような共通點がみられる。

第一點はいづれも山地が多くて田が少なく、もしくは土地の生産性が低くて米の自給が不可能であるような山開部ないし邊境地帯に發生していることである。耒陽縣については『耒土、燥に近し。その田、下中に間々膏腴（腴の誤植と思われる——西川）あるも十の二、三にすぎず、加うるに早乾を以てするの時は民食維え難きに逢う。……（中略——西川）……』とされる。

長沙府の安化縣は『萬山の中に僻處』し『山多く田少なく、民食半ばは寶慶・益陽に資す』とある山村であつた。

（湖北）武昌府の崇陽・通山・通城の諸縣も『山谷幽深・民情犷悍』とか『地瘠民貧・僻處に偏偶す』とされる山地であつ

た。……」（傍點西川。出典を記した部分は省略させていただいた。）

見られるように小島氏は、抗糧暴動が起った諸縣が山村、山地であることを史料に基いて立證しておられる。明らかに一縣全體を山村、山地と捉えており、縣内の、したがって山村、山地内部の、地域による違いに着目する視點は認められない。小島氏の視點はあくまで縣單位の視點であり、同一縣内の地域による違い、山間部内部の地域による違いを検討して、抗糧暴動が、山間部でもとくに「……ような」地域に限って起っている、という論證はなされていないのである。一縣内部、山間部内部の地域による違いに着目する視點がなかったからこそ、縣單位の統計に依據して、抗糧暴動が起った地域の村落の階級構成を立證しようとしたのであろう。もともと、今回の反論の中では「地形や地質、水利の條件などが……多分に不均質な地域からなる『縣』では、縣全體の統計だけではどうしようもない。」「その意味では、抗糧暴動にかんして『中國經濟年鑑』の統計を使用した場合にも、まずこの點を各縣について検討すべきだったと思う。」と述べておられるが、著書の段階では、このような視點はつらぬかれていなかったのだ。

ところで、著書には「山間部乃至邊境地帯」（「」は小島氏）の語が見えるが、これは、故重田徳氏の研究に依據していると思われる。重田氏は『湖南省例成案』にもとづき、地主制の二つの類型を設定して、これを地域差として捉え、佃戸の隸屬度が強い場合を、安化・龍山・道州等、山間部乃至邊境における地主制の存在形態、逆に佃戸の力が強い場合を、岳州・澧州等、洞庭湖周邊の產米地における地主制の存在形態と把握された。（『清代社會經濟史研究』

岩波書店 一九七五年 七一―七二頁。なお、この要約は重田説の全面的な要約・紹介ではないことをお断りしておく）小島氏が、重田氏のこのシェーマに依據しておられることは、氏自身が著書一〇三―一〇四頁に重田氏の研究を紹介した後に續けて、「ところで抗糧暴動は『山間部乃至邊境地帯』すなわち重田氏が明らかにした所によれば、正に『家父長制的關係につつまれた前代の遺制』が残存する地域の……」と述べておられることから明らかである。さて、重田氏は、山間部乃至邊境の語に「」を附しておられないが、小島氏は、「山間部乃至邊境地帯」と「」を附してこの語を使っておられる。この「」は、重田氏の論證に依據したことを示す「」であると思われるが、そうだとすれば、重田氏は、山間部乃至邊境に「必要不可欠の限定條件」を附することなく、一般的に、山間部乃至邊境を、洞庭湖周邊の產米地に對置しておられる。小島氏は、重田氏とは違つて「山間部乃至邊境地帯」に特定の意味を持たせているのだ、即ち、無限定の山間部乃至邊境地帯ではなく、必要不可欠の限定條件を附した、「……ような」山間部乃至邊境地帯を「山間部乃至邊境地帯」と表記したのだ、「」は、「……ような」という限定條件をいちいち附する煩雜さを避けるための、簡略化を示す「」なのだ、と、あるいはいわれるかもしれない。もし小島氏が重田氏とは違つた意味で「山間部乃至邊境地帯」という語を使われたのなら、その旨を明示しておかれるべきではなかったか。「」に關していえば、著書一七六頁の註例に、「……この二縣の場合には、『山間部』＝土地生産力の低さの故に地主主小作制が一般的支配的になり得ない地域とは區別されるべきである。……」という記述がある。この場合の「山間部」も無限定の山間部一般ではなく、土

地生産力の低さの故に地主「小作制が一般的支配的になり得ないような山間部を「山間部」と表記しているのだ、即ち、必要不可欠の限定条件を附與した山間部を「山間部」と記しているのだ、といわれるかもしれない。假りにそうだとしよう。そのばあい、この必要不可欠の限定条件は、單なることばのあやにとどまることなく、論證内容においても具體的に生かされていなければならないであろう。ところが、具體的な論證内容においては、前述の通り小島氏の視點は縣單位の視點であつて、同一縣内の地域による違い、山間部内部の地域による違いを具體的に検討して、抗糧暴動が、無限定の山間部一般ではなく、山間部でもとくに「……ような」地域で起つてゐる、という論證はなされていないのである。このような著書における小島氏の具體的な論證内容、即ち、抗糧暴動が山間部ないし邊境地帯のうちでも、とくに「……ような」地域で起つてゐるという論證を抜きにして、縣規模の統計に依據して、「これらの地域では自作ないし自小作、すなわち賦税をになう零細な直接生産者が、村落内で高い比重を占めていたこと」を裏づけようとしたとされた、その論證内容が、山間部乃至邊境地帯、あるいは山間部に「」を附したからといって、急に變わるものではあるまい。

以上により私は、小島氏が今回傍點を附された語句を、氏がいわれるように、必要不可欠の限定条件を示す語句とは解し得ず、山間部ないし邊境地帯の全體を一般的に説明したことばと解するほかなかったであり、小島氏の論證には承服できない。

② 私が「生産性の低い山間部、邊境地帯でも、たとえば、廣西省桂平縣では……（桂平縣志の引用）……とあり、山間部で地主の土地所有が進んでいることを知り得る」と記した點については、私

の文章が紙數の制約を意識しすぎて舌足らずになっていた。「生産性が低い」とされる山間部、邊境地帯でも、たとえば……（桂平縣志の引用）……とあり、山間部でも生産性の高い地域があり、そこでは地主の土地所有が進んでいることを知り得る」と書くべきであつた。桂平縣の山間部（三都五秀、宣一・二里）が土地生産性の高い地域であることは、ご指摘の通り拙稿の中で述べてゐる。ただ、「書評」で「桂平縣志」を引用するばあい、生産性が高いことを述べた部分まで引用すると引用が長くなりすぎるので、すでに前稿で指摘しておいたことでもあり、その部分の引用を省略し、したがつて説明文の中でも「生産性の高い地域があり」という説明を省いて、單に「山間部で地主の土地所有が進んでいることを知り得る」と書くにとどめたのだ。いわんとしたことは、小島氏が山間部、邊境地帯をおしなべて土地生産性の低い地域→地主「小作制が一般的支配的になり得ない地域と捉えていることに對して、「山間部、邊境地帯という地理的條件によつて、土地所有形態、階級關係を一義的に規定できるものであらうか。」と疑問を呈し、山間部のなかにも土地生産性が高い地域があり、そこでは地主的土地所有が進んでいることを指摘し、また、地主制の展開度は、土地生産性の高低とあわせて商品經濟の浸透度、農民の副業のあり方などを考慮に入れて、個別的・具體的に検討する必要があるのではないか、という點にあつたのである。「書評」で私が「桂平縣志」を引用したのは、生産性の低い土地でも地主制が成立していることを主張するためではなく、山間部でも地主制が成立していることを指摘するためであつた。桂平縣志の山間部が、具體的にどういう地域であるかについては、前稿を讀んでいただければわかることだと考えて、むし

ろ、前稿をふまえて問題を提起したのであって、小島氏がいわれるように、前稿と「書評」とで『桂平縣志』の記述の扱い方を變えたわけでは決してない。即ち、『桂平縣志』の記述を、前稿では、土地生産性が高いので地主制が展開しえたことを立證する根據として使い、「書評」では、生産性が低い土地でも地主制が成立しうる根據として使ったのではない。そもそも、小島氏のように山間部、邊境地帯をおしなべて土地生産性の低い地域→地主「小作制」が一般的支配的になり得ない地域と置いてしまうことに對して疑問を持ったのは、桂平縣の山間部の例——即ち山間部でも土地生産性が高く、地主「小作制」が展開している地域がある——が念頭にあったからであり、「書評」で桂平縣の山間部が土地生産性の高い地域であることに特にふれなかったことは、「書評」における私の問題提起の妥當性を弱めこそすれ、強めることにはならないのだ。土地生産性の高い山間部であることを明記した方が、私の論旨にとっては、むしろ有利だったのである。紙數に制約されたとはいへ、説明不足で誤解を招いたことは反省するが、「これが『研究者のとるべき態度』なのだろうか」との論難には承服できない。

③ 左宗棠の「師賀蔗農あて書簡」の解釋をめぐって呈した疑問に對する小島氏の回答について。

④ 史料解釋に關しては、「私の舊解釋の可能性も若干は殘しておきたい」との留保つきで、「落穂拾い」と解することに同意された。しかし、「これが李氏の小作地ではなく、『手作地の状況』を示すこと」には變りない、と言われる點については、たしかに常識的には、落穂拾いが小作地で行われるとは考えにくい。だが、小島氏もいわれるとおり、當該地方における落穂拾いの慣行の具體的內

容が不明な段階で、左宗棠のこの記述をもって、地主手作地の例證とすることにも、なお檢討の餘地があるように思われる。たとえば、この李氏の田が「刈分小作」の小作地で、農婦が地主側の分から少量を盗み取ったということも考えられるのではあるまいか。

⑤ 農婦たちが穀を賣りに行った店について、私が、(一)に入れて「おそらく李氏の經營する雜貨店であらう」と注記したことに對して、私の誤りを指摘された。この點は誤讀であつたことを認める。しかし「竊まれた自分の田の穀を買いとるほど慈悲深い郷居地主の姿を思い描いているのだろうか？」と記されている點については、もしその穀が竊まれた穀であることがわかつていたとしたら、李氏でなく楊氏であつても、同じ地主仲間として、また、李氏の門前に店を開いているよしみから、その穀を買い取るようなことはしないのではあるまいか。竊んだ穀であるか否かが明らかでないからこそ買い取るのではなからうか。

⑥ 私が「小島氏は、一つの假説を立てて、それに合わせて、左宗棠の報告の斷片を切りつないでいるが……」と書いたことに對し、小島氏は、「單に擧足取りの批判ではなく、これと『かなり異った郷居地主』、當然またこれと對をなす農民の『姿』を説得的に提示」するよう求められた。目下、私の研究狀況と諸條件から、研究分野を湖南省にまで擴げることができない状態にあるため、時日を近い將來に特定できず申し譯ない次第であるが、湖南の地主制と農民の實態に關して充分な知識を得、その概略を把握した上で、これをふまえて「師賀蔗農あて書簡」を分析し、批判の對象となりうるような自説を提出して責任を果せる日が一日も早くなるよう努力したいと思つてゐる。

④ 「窮國の亂」に關する問題について。

① まず小島氏は、私の要約が「粗雑かつ短絡的」だと論難された。「窮國の亂」については、第二部第一章(五) 抗租暴動についての節でとりあげられており、この第五節は全體で五頁餘の短いものである。紙數に制約される書評においては、どうしても重點的、選擇的に問題點をとり上げて要約、紹介することにならざるを得ない。そもそも四〇〇頁に及ぶ著書を、紙數に制約がある中で、全面的に、正確に要約することは、著書を要約し紹介することそのことを主要な目的とした場合においてさえ、ほとんど不可能なことである。まして私が依頼されたのは書評であり、著書の中の問題點を指摘、書評することに、限られた紙數の主要部分をあてる必要上、書評の目的に沿ってできる限り簡潔に要約することを心がけたのである。この第五節に關していえば、小島氏が、「窮國の亂」が起つた地域について「寄生的な土地所有の一般化」を「前提」として設定しておられることを問題點として指摘するために「書評」のような要約を行ったのである。即ち「しかしそれはこの地域における地主制、とくに寄生的な土地所有の一般化、従つて村落が主としては佃戸によつて構成されていたという條件を抜きにしては考えられない。」(傍點西川)という小島説が、氏の使用された「統計」による限り、成立しないのではないか、ということ指摘する必要上、最少限の要約を行ったのである。小島氏が「寄生的な土地所有の一般化」という問題を提起しておられないのに、提起しておられるかの如くに誤讀して要約したのであれば、「粗雑かつ短絡的」との論難も甘受しよう。しかしそうではない。小島氏は明白にこの問題を提起しておられるのだ。

② つぎに私が、「統計」から見る限り、この地域について『寄生的な土地所有の一般化』という前提は成立しない』(この一句は小島氏の著書の原文から借りたものである。)と述べたことに對して、小島氏は、「統計」にあたつて確かめる手續きをとらなかつたのは大きな錯誤であつたことを認められ、「だが、だからといって、西川氏のように、『この窮國の鬭争がひろがつた(私の原文には傍點を付した部分の字句はない)地域では、寄生的な土地所有の一般化』という前提は成立しない」と斷定することはできない」と私を批判された。これは全く見當違いな批判である。私はそんな斷定はどこにもしていない。小島氏の「前提」を、氏の著書における視點・方法に従つて、氏が利用した「統計」にもとづいて裏づけようと試みたところ、裏づけることができなかったのも、小島氏が抗糧鬭争において利用された『中國經濟年鑑』の統計から見る限り、「窮國の亂」の舞臺となつた湖南・湖北の諸縣について、「寄生的な土地所有の一般化」という小島氏の「前提」は成立しない、と述べたにとどまつてゐる。あくまでその限りにとどまつてゐるのである。それ以上のことは言っていない。

③ しかも小島氏は、私の要約が「粗雑かつ短絡的」だとして、半ページ餘にわたり、「原文はこうだ」と御自身の「原文」を引用しておられるが、その際、何のことわりもなく、原文の一部を書き換えた上で引用しておられる。書き換えが行われているのは、一つは著書一三〇頁五行目の「この全く階級的な要求、その實現をめざす組織が……」以下の文を、紙數に制約がなかつたと思われる著書では改行されておらず、引用部分全體が一つの段落をなしていたのに、紙數に制約があつたと思われる今回、わざわざ改行して、二つ

の段落に分けている。いま一つは、著書では、「この全く階級的な要求、その實現をめざす組織が」となっているのを、今回「この全く階級的な要求の實現をめざす組織が」に變更しておられる。しかも長文の引用をされながら、同じ段落内に含まれており、私の要約、問題提起に重要なかわりを持つ、同頁九行目の「このことと地主にたいする……」以下の文章は引用されていない。このような操作を通じて文意を微妙に変えてしまった上で、「みられるように直接生産者である佃戸が副業的商品生産、また米の販賣、購買などをつうじて商品流通市場と深く結ばれていたことに、『減租、減息、反釐金』という『この全く階級的な要求』が提起された理由を見、その實現をめざす組織が『團練』の形式を借りて作られた条件として、『寄生的な土地所有の一般化……』を推定したので。」(傍點小島氏、△△西川)と書いておられるのである。しかし、著書の原文全體の文脈からすれば、「寄生的な土地所有の一般化」は、「窮團」の組織が「團練」の形式を借りて作られた条件としてのみならず、「この全く階級的な要求」が提出された条件としても前提されていたことは明らかではなからうか。なお、著書の原文では「推定」ではなく「前提」の語句が使用されていたのだ。私は、はたしてこの「前提」が成立するかどうかを問題にしたのである。小島氏はなぜこのような操作を加えてまで、私の思考方法が「粗雑かつ短絡的」だという印象を讀者に與えようとするのだろうか。

⑤ 「太平天国と農民」の項で、私が「小島氏の研究によれば、これらの諸闘争と太平天国が直接結びついた例は未だ見出せず、ただ抗糧暴動についてのみ呼應する動きのあったことが明らかにされたにとどまっている。」と書いたことについて、與えられた紙数は

残りわずかになったので、この問題については別の機会に述べさせていざうことにはしたいが、一言だけ述べておくと、私が「直接結びついた例」として想定している事態は、小島氏が主張される「直接結びついた例」とは、その具體的内容を異にしているということである。

⑥ 「マルクスの『太平天国』論」についての私の理解、要約のし方に對する小島氏の批判は承認する。私自身が當面こうしたテーマに對して關心が薄いため、研究史を充分に吟味することなく、一讀後の印象を輕率に書いてしまったことを率直に反省している。

⑦ 最後に、南京建都以後の太平天国政權の性格をどう捉えるか、という點に關して。私が問題にしたのは、小島氏の太平天国評價が、一九六六・六七年頃を境として變化したことに關連してであった。即ち、一九六一年の筑摩『太平天国』では、建都イコール王朝化とみなし、短期間にせよ、革命的性格を持った政權が成立していたことを認めてはいなかった。そもそのような問題意識は全く認められなかった。ところが、一九六六年十一月に發表された『史朝』論文(著書收録)では、建都直後の太平天国政權の性格いかんという問題をまず設定し、事實に基いてこれを檢證するという手續をふむことなく、太平天国運動の理解にかかわるような論點について、舊説をそれとなく修正された。その點に疑問を呈したのであるが、この疑問には答えられず、私が「安易に政權の階級的な性格について規定」しようとしており、小島氏にもこの問題についての回答を求めているのかのように問題を變えてしまわれている。

⑧ 以上、小島氏の私に對する反批判を逐次検討してきた(紙數の制約上、一部の論點を割愛せざるをえなかった)が、拙評は、内

容紹介及び各論文に即して個別的に疑問を呈した前半部と、著書全體にかかわる問題提起を行った後半部とから成っており、私が重点を置いていたのは、むしろ後半部であったが、今回お答をいただいたのは、主として前半部についてであり、後半部については「いづれ答えさせていただく」とのことなので、その日を待たせていただくことにする。